税から学んだこと

那賀町立鷲敷中学校２年　　尾崎　結菜

私がまだ自分の体より大きいランドセルを背負っていた頃。普段の母からは考えもつかない慌てた声で電話がかかってきた。「落ち着いて聞いてよ。」その電話の内容は、弟がしばらくの間、病気で入院することになったというものだった。突然の思いもよらぬ出来事に、頭の中が真っ白になったのを今でも鮮明に覚えている。私の弟は、今でこそ溌剌として元気だ。しかし幼い頃は病院に行くことが多く体は弱かった。弟は五歳という幼さで長期入院を経験することになったのだ。私もまだ幼かったので、両親が弟の世話でかかりっきりになっているのが寂しかった。両親の顔を見るより、近所に住む祖父母と顔を合わせることの方がはるかに多くなっていた。

一人の時間を持て余した私は、よく町の図書館を訪れていた。たくさんの本を読み、本を借り、静かな図書館で自分の好きな時間を過ごしていた。こんなに多くの本があることを不思議に思った私は、司書の方に「こんなにたくさんの本は、どこからくるんですか。」と尋ねた。すると「貸し出すための本は税金でまかなわれているんよ。」と教えてくださった。その頃の私にとって、税金のイメージは、店で買い物をしたら支払うお金が高くなるという厄介な存在であった。しかしこのとき、大好きな本を与えてくれるものという税の働きを知ったのである。幼いながらも、税金のありがたさが心に刻まれた瞬間でもあった。

そして中学二年生となった私は、「租税教室」で税金について学習する機会を得た。そのとき私の目に飛びこんできたのが、国民医療費という文字だ。幼い日に長期入院をした弟を助けてくれたのは、医療従事者の方々であり、税金であったのだと改めて実感し、さらに税金への感謝を深めたのであった。弟もあれからは入院することもなく、元気に過ごしている。私たちの町の「はぐくみ医療」は、十八歳まで医療費を負担してくれるというものだ。私たちが大きな病気にならずに成長していけるのも、このような税の助けがあるからだと深く感謝した。

私たちに一番関わりの深い消費税が十パーセントになって、もうすぐ三年が経つ。今も税金にマイナスイメージを持つ人は多くいる。しかし考えてみてほしい。一人一人が納める税金によって、私たちは多大な恩恵を受けているのだ。税金教室で教えていただいた「税金は、平和で健康で人間らしく生きるため、みんなが平等に負担する会費のようなもの」という言葉は私の心に強く刻まれた、私は弟にこの言葉を伝えたい。日本の税金の使われ方を正しく理解し、税金に感謝できる人になってほしいと思う。そして税金について得た知識は、弟以外にも伝えていきたい。税金について理解し、正しく行動できる人が少しでも増えてより豊かな社会が築けるように。私はこの社会の一員として、自分にできることを続けたいと思っている。